

40

2017

特集1 管理職の意識を変える取組み

特集2 DVと子ども

MIW

千代田区男女共同参画センター情報誌

通信



表紙は、今回ご登場いただいた皆様：1段目左から、高塚剛輝さん、春原由紀さん、森田展彰さん、2段目左から、霜垣和子さん、子育てひろば「あい・ぽーと麹町」の子育て・まちづくり支援プロデューサーの皆さん、三戸花菜子さん、川田篤さん、3段目左から川島高之さん、大日向雅美さん、越川房子さん、瀬川未佳さん



MIW(ミュウ)は、千代田区男女共同参画センターの愛称です。公募で区民から寄せられました。Mはman(男性)、Wはwoman(女性)、Iはintercommunication(情報や意見交換)の頭文字です。

管理職の意識を変える取組み

ワーク・ライフ・バランス（WLB）が推進されるなか、働き方改革などが提案されています。WLBを推進するためには、管理職の理解が欠かせません。高塚剛輝さん・霜垣和子さん（株式会社リクルートマーケティングパートナーズ）、川島高之さん（NPO法人コチカラ・ジャパン代表）に管理職の意識を変える取組みを伺いました。



「育ボス ブートキャンプ」の取組み。男女2人の管理職がメンバーの家庭で子どもたちと一緒に食事の準備をする（今回取材した方たち以外の体験の様子）

管理職が子育て・生活体験

育ボス ブートキャンプの取組み

高塚剛輝さん・霜垣和子さん（株式会社リクルートマーケティングパートナーズ）

『ゼクシィ』『スタディサプリ』など多様な情報誌を発行する株式会社リクルートマーケティングパートナーズでは、昨年から「育ボス*ブートキャンプ」というユニークな取組みを始めています。社員が「育児をしながら働く人」の生活を体験することで、多様な価値観・生活を理解し、意識を変えようとする試みです。管理職から導入を進め、メンバー*であるワーキングマザーの家庭で子育てと生活体験をします。今回は参加した管理職お二人にお話を伺いました。

「自分が偏った人間だった」と実感、メンバーとの関わり方が変わった

高塚 私は30歳の独身、管理職になって2年目で、12人のメンバーがいます。うち1人がワーキングマザーです。体験した日は、17時に慌てて仕事を終了し、女性メンバーの家へ向かいます。夕方のラッシュ時に電車で1時間。子どもたちが学童クラブから戻ってくるのを迎ええました。小学1年生の双子の元気な男の子と荷物を片付けて食事の用意。一緒に餃子を作り、大いに盛り上がりました。作った餃子を食べ、宿題も一緒にやり、子どもたちがお風呂に入っている時間にほっと一息。子どもたちの髪を乾かし、20時半頃、ママ（女性メンバー）が帰宅。今日あったことを話して21時頃、家を出ました。体験して、自分がいかに一般社会で偏った人間であったかを実感しました。私は職住接近で24時間自分だけのために時間が使えます。頭ではわかってはいたつもりですが、自分とは違う人たちの生活を肌で知ることができました。

また、体験家庭で、女性メンバーから職場では聴けない仕事と家庭の両立についての悩みを伺えました。キャリア

*育ボス：イクボスとは：職場で共に働く部下のワーク・ライフ・バランスを考え、その人のキャリアと人生を応援しながら、組織の業績や結果を出しつつ、自らも仕事と私生活を楽しむことが出来る上司を指します。



ダイバーシティを進めるためのワークショップについて話すメンバー

◆株式会社リクルートマーケティングパートナーズ

従業員の構成 男女比 女性6割：男性4割 年齢比
20代：45%、30代：44%、40代：10%、50代：1%
育ボスブートキャンプの詳細：http://www.recruit-mp.co.jp/feature/company/post_59.html

育ボス ブートキャンプ

普段、会社の中には学べないことを経験し、それを「ダイバーシティ&インクルージョン（多様な個が活躍している状態）」につなげようとの試み。4日間、男女の管理職がペアになり、通常業務の後、子育て中の女性メンバーの家庭で、子どものお迎え、夕食の準備と一緒に食事、子どもの宿題を見て、子育て中の女性メンバーの話を聞く体験です。このプログラムは「講座」「体験」「発信」の3つの構成で、事前に仕事と家庭の両立に関してメンバーを取り巻く環境や職場でのダイバーシティ（多様性）について学び、次に実際の子育てインターンの体験、そして、その体験をもとに自らの職場を変える発信の提案をします。昨年7月から本格的に実施し、これまでの経験者は10人。まず管理職から始め、対象を広げていくそうです。

があつてバリバリ活躍している女性メンバーにそんな悩みがあったのかと、想像することすらなかったのが本当にびっくりしました。

育ボスブートキャンプを体験した後は、職場でも自分と他人とでは、求めるものも目指すものも違うので、自分の考えを押し付けずに相手を



高塚剛輝（たかつかよしき）さん

株式会社リクルートマーケティングパートナーズ
企画統括室 経営企画部経営企画グループ グループマネージャー

もつと知るようになって、メンバーとの関わり方が変わりました。それまでは、メンバーとの間でプライベートなことにとどこまで踏み込んでいいのか躊躇（ちゅうちよ）していました。自分から関わるように変わっていったと思います。

管理職としては、個人のモチベーションと組織が目指す

「子育ては体力」と実感、一人ひとりのメンバーの良さを活かすマネジメントに

霜垣 私は12人のメンバーを抱える管理職で、その中にワーキングマザーはいませんでしたが、ですから正直なところ、体験をするまで、なぜ私が育児体験をするのかとの思いがありました。でも、やってみて

ものをつなげていくよう、噛み砕いて説明するようになりました。育ボスブートキャンプを体験して、実感できたことを仕事上のマネジメントに活かしました。多くの人に体験してもらいたいと思います。

びっくり。育児体験がメンバーの力を引き出し、組織の力をアップさせることにつながったからです。

体験しての感想は「疲れた！ワーキングマザーは体力がいる！」でした。17時に会社を飛び出して駅までダッシュ。子どもを迎えて夕食の準備、その間立ち通しです。子どもたちは、チャンバラごっこに鬼ごっこ、一緒に遊ぼうと体当たりでぶつかってきます。翌日は、本当に筋肉痛でした。しかしそ

の後、その家庭の女性メンバーが育児休暇から復帰した時の年齢が、まさに今の私の年齢と一緒だったと知ったのです。子育てにはこんなに体力が必要だったのか、子育てしながら仕事することがどんなに大変かを身をもって実感しました。

ワーキングマザーへの理解が深まったことはもちろんですが、子どもと出会ったことからの気づきもありました。伺ったのは双子の男の子のいる家庭で、二人に個性の違いがあり、接



メンバーの家庭で子どもたちと餃子を作って食事をする高塚さんと霜垣さん



霜垣和子（しもがきかずこ）さん

株式会社リクルートマーケティング
パートナーズ
マリッジ&ファミリー事業本部営業
統括部営業2部首都圏1グループ
グループマネージャー

しているうちに、それぞれを比べるのではなく、そのままの存在を認めることが大切なんだと実感しました。「個性を大切にする」ことは、当然、頭ではわかっているつもりでしたが、双子に接した経験が、メンバーを見る目を変えました。

職場にいる男性メンバーに対して、正直、もう少しテンポよく仕事ができたらもっといいのと思いました。けれども、この体験後、彼のこ

とをもっと知ろうと話を聞いてみたところ、趣味の世界で活動していることを初めて知りました。そこで、新たなプロジェクトに彼の得意分野をつなげてやってみよう促したところ、本人がやる気を出し、事業も軌道に乗ってきたのです。

メンバー一人ひとりの良さを知ること、人も業績も変わってくると思いました。

さらに、私自身がメンバーを信頼して仕事を任せられる

ようにもなりました。管理職として何となく自分が頑張らなくてはならないと思い込んでいましたが、体験中は定時に職場を出て以降、職場とは連絡がとれません。実際のところ心配していましたが、私がいなくても職場は何の支障もなかったのです。それ以降、職場のメンバー一人ひとりに任せるようになり、それぞれにやる気が出てきたように思います。

子育てと仕事の両立は大変そうだと、将来のキャリアを描けないと思う20代のメンバーがいます。大変だけど工夫して両立しているワーキングマザーのリアルを知って、若い人たちが中長期的なキャリアを描けるように、この体験を会社の取組みにつなげていけたらと思います。

仕事時間を減少、生産性のアップを

私が社長*を引き継いだ当初は長時間労働が当たり前で、有給休暇の消化率は40%以下。それが4年半で98%になり、残業は4分の1に減りました。一方、収

益は3年間で8割増えて、株価は倍になりました。ワーク・ライフ・バランス（以下WLB）は、福利厚生、人権の問題でもありますが、経営戦略として取り組んできたところが大きいですね。

育児や介護、自分のライ

フのために時間を使うと欠員が出て、総労働時間が減ります。けれど、企業としては組織の生産性を減らすわけにはいきません。そのために、分母となる仕事時間を減らして、分子の仕事の

成果を増やす。私は、WLB

Bとは「生産性向上」だと思っています。

その具体例は、例えば会議の短縮です。時間を半分、人数半分、回数半分にすれば、8分の1になります。そのためには、資料は事前配付で読んできた前提

で始める、会議のゴールを設定して必ず結論を出す。職場内の資料はスリム化し、手書きでも良いなど私は言ってきました。

また、生産性を上げるためには、部下の一人ひとりの貢献度を高めることが大

千代田区のイクボス研修

2月15日（水）、千代田区では、新任管理監督者の職員向けに「イクボス研修」を実施しました。講師に、NPO 法人ファザーリング・ジャパンの東浩司^{あづまこうじ}さんをお招きし、職場でワーク・ライフ・バランスを進めるための管理監督者としての取組みについて学びました。当日の参加は25人。参加された方から「イクボスの役割がよく分かりました」「上司自らが仕事と私生活を両立し、職場環境を整えるようにしたい」「多様な働き方が増える中で、今までの働き方を見直す必要を感じました」との感想が寄せられています。

上司の体験を受け入れたワーキングマザーの声

- 受け入れ後、育休明けからの色々なことが急に蘇ってきました。それで、気がついたら誰にも話したことのない気持ちを話していました。
- 平日の夜の時間帯のリアルなところを見に来てくれた会社の人は初めてで、会社の枠を超えて自分の側に来てくれたように感じました。
- 自分自身がキラキラマザー（頑張って輝いているお母さん）の役割をやってきたけれど、本当はもっとわかって欲しかったんだ、伝えられていなかったのかも気づいて少し驚きがありました。



川島高之(かわしまたかゆき)さん

NPO 法人コチカラ・ジャパン代表、
NPO 法人ファザーリング・ジャパン
理事

平成 24 年から 28 年 6 月まで、三
井物産ロジスティクス・パートナーズ
株式会社代表取締役。

6 年間、朝 5 時に起きて家族の朝食と息子の弁当を作り、PTA 活動に参加し、少年野球チームのコーチも務めた。全国各地でイクボス研修講演を実施。

事です。そのために、部下のライフと仕事を知らないとなりません。ライフの面では、家庭環境や子どもの状態、趣味や地域での活動などを知っているかということ。もちろん、普段から部下と人間関係を構築して話せる関係を作り、上司が常に部下の視線に立ち、傾聴・共感・賞賛することが必要です。僕は子育てしていたから夜飲みにはいかず、ランチセッションや普段の雑談で人間関係を作ってきました。

次に部下の仕事を知ること。どうしたいのかのWill、何が得意なのかのcan、そして組織や上司が部下に望むneed、この3つがびつたり重なり、部下のモチベーションは最も高まり、貢献度はマックスになります。上司が極力、それに近い仕事を探してくる、部下の将来のミシに仕事を関連づけてあげれば、一人ひとりのモチベーションが高まり、組織の生産性も上がります。

管理職の意識が変わる／変える

管理職の意識が一番変わるの、自分自身が私生活の時間を何かに使わなくてはならなくなった時、自分ごとになった時です。ですが、なった時では遅すぎます。そこで、男性管理職の意識を自分ごとにするのにはどうするかが問題です。私は3つを提言してきました。1つは、人生は一回きり、自分がワクワクすることやろうぜ！ それまで男性は仕事のためにいろ

50代男性管理職への3つの提言

川島高之さん(NPO 法人コチカラ・ジャパン代表)

いろいろなことを犠牲にし、自分の気持ちを封印してきています。それを「開けようよ」というのです。2つ目は、将来の危機に対する準備。介護離職や熟年離婚、自分の病気もあるかもしれません。今、家庭帰属して働き方改革をしておく必要があるわけです。3つ目は、業績にプラスになる。部下は生き生きとして貢献度は高まる、収益は増えて離職率は減る、業績はあがる。だったら「管理職として意識を変えない手はないでしょう」と言っています。

男性管理職が自分ごとにして意識を変える取組みとして、自分がやりたいことと書き出す簡単なワークショップがあります。仮に15分でもやってみると盛り上がりやすい。封印していた自分の気持ちに気づき、わずかであっても行動を変えられる人が出てきます。

WLBというと、子育て中の女性支援が強調され、子育て女性とそうでない人との対立するようになってしまいがちですが、そうではありません。誰もが自分

も休めてライフが充実すれば、互いが互いをカバーし合うようになります。それが持つている私生活を大切に、尊重しあうことが大事なのです。

今僕は52歳ですが、これまで同世代の男性から同世代の男性へWLBを進める発言はほとんどありませんでした。ですから、実際に取り組んで成果を出してきた経験者が発信することで

変わることがあればと思っています。

出来ない理由を挙げても何も変わりません。しかし、ほんの少し意識と行動を変えられることはできます。私はまず、365日からPTAや運動会、学芸会などライフの時間を天引きして予定を立てました。新年度、皆さんも出来る範囲で新たな予定表作りに取り組んでみてはいかがでしょうか。



川島さんのイクボス研修でのワークショップの様子



子どもがドメスティック・バイオレンス（DV）を見てしまうことは心理的虐待にあたると児童虐待防止法で定められています。今回は臨床心理士の春原由紀さんと精神科医の森田展彰さんに、DVの子どもへの影響と子どもを尊重する関わりについてお話を伺いました。

DVの影響で子どもが 身につけてしまう 行動や価値観を変える コンカレントプログラムについて

春原由紀さん（臨床心理士）

DVの子どもへの影響

子どもは、生まれた時から、欲求や不快を感じて泣いた時に母親や周りの人が関わってくれることで、基本的信頼（心理学者のエリクソンの言葉）が

できてきます。子どもは基本的な感覚を核にしなが自分を肯定し、発達していきます。ところが、DVが起きている状況では、母親（統計上、被害者は圧倒的に女性が多いので）はパートナーの顔

色を伺い、突然の暴力・暴言に対応しなくてはなりません。母親が緊張関係の中にいると、本来子どもに向けるはずの意識や注意が向かなくなりま

す。すると、発達面から見ると、子ども自身に「自分は周囲に受け入れられ、生きていて良い存在だ」との感覚が育たず、愛着*の概念で言えば、お母さんとの安定・安心できる関係が作れなくなってしまうのです。

子どもは1歳前くらいから探索行動を始め、学習・吸収していきますが、それは子どもが安心してできているから可能なこと。けれども家庭に緊張や暴力があると、子どもは安心して探索行動がとれず、むしろ、おとなしく手のかからない子だったりします。その場合、幼児期になると落ち着かない、乱暴になるなど

の行動上の問題が出てくることもあります。

家庭で学ぶ夫婦の関係性

私たちは自分の親から夫婦の関係性を学びます。子どもは自分の家庭、親の関係を当たり前前のこととして育っていきます。

私の相談者で、小さい時から母親が暴力を受けているのを見て育った女性がいました。自分は身体暴力を受けなかったけれど、「こうやって暴力が支配していくのが家族なんだ」、TVで暴力がない家族を見ても「それはフィクションだ」と思っていたそうです。そうした家族から離れたくて、若くして結婚したのですが、最初は優しかった夫がしばらくして暴力を振るうようになり、その時彼女は「やっぱ

り、家族ってこんなものだ」と思ったというのです。私はその言葉が忘れられません。その後、支援を受けて新たな生活を始めた、生きていく力のある女性でしたが、暴力のある家庭で育つと、家族とは暴力と支配があるものだと思ってしまうことがある例だと思います。

無意識に身につける価値観

暴力がある家庭環境で育つと、「暴力は正しい、暴力を使えば問題は解決する」という価値観を持つようになることもあります。また、加害者は徹底的に自己を正当化し子どもにもそれを吹き込むので、子どもは「やられる母親が悪い、力がないからだめなんだ」と、母親を尊敬・尊重しない価値観を持つようになり、また、「愛情があるから支配する」との価値観を身につけてしまうこともあります。

人生観や夫婦観・家庭観は家庭で学んでいきます。子どもは幼稚園ぐらいから、親をモデルに男性像、女性像を作っていくので、育った家庭で身につけてしまう価値観を変えるためには、早いうちから何らかの再学習をすることが大事

春原由紀（すのはらゆき）さん

武蔵野大学名誉教授、臨床心理士、NPO 法人 RRP 研究会理事。DV に曝された母子への支援としての「母子同時並行グループプログラム」（コンカレントプログラム）の実践研究、親子関係に直接的に介入し、新たな関係を創造していく PCIT（親子相互交流療法）を取り入れた臨床実践等を重ねる。著書に「子ども虐待としてのDV」（星和書店）他。



*愛着：子どもが不安を感じた時に養育者が近くにいると安全と安心感を回復する関係性



火山口から赤い「怒りの泡」が出ている様子▶

◆コンカレントプログラム**

カナダで誕生したプログラムを包括的DV被害者母子支援の一環として、2008年から日本でNPO法人RRP研究会と武蔵野大学心理臨床センター子ども相談部門との協力で開始。

コンカレントプログラム（日本版）の
テーマ（母親グループ）

	テーマ
第1回	つながりをつくり沈黙を破る
第2回	多くの感情を大切にする
第3回	父親から母親への暴力による子どもへの影響
第4回	父親から母親への暴力の責任について
第5回	対立や怒りの理解と健康な怒りの表現
第6回	喪失を悼み新たなつながりを育てる
第7回	セルフケアの重要性和前へ進む

再学習のためのプログラム

です。

再学習の一つとして、DVの被害から離れたお母さんと子どものための心理教育プログラム「コンカレントプログラム」**

があります。母と子のグループが別々に分かれて、毎回同じテーマを同時並行で実施するプログラムです。テーマは暴力の影響や責任、自分の感情（特に怒り）、新たなつながりをどのようにつくるかなどです。私が関わるRRP研究会

では、週1回120分、7週のプログラムを実施しています。

参加した子どもは、最初は

「安心できない場では感情を抑える」「コントロールできず気持ちが悪くちやぐちやになる」「どう感じているかがわからない状態」であることが多いと言えます。そこで自分の気持ちにあてはまる言葉を探し表現できるように学びます。

特に怒りの感情は大切です。怒りはどのような感情か？どのように解消するか？暴力のようについても考えます。

火山の実験が（左上）がわかりやすいですね。「馬鹿にされた」「足を踏まれた」など日常的に怒りを感じることを言いながら粉せっけんをスプーン1杯ずつ火山の火口に入れていきます。怒りの材料を全部入れきつたら、「小さなきつかけ」としてお酢を入れます。そうすると化学反応を起こし、火山口から赤い泡がブクブクとでてきます。それを見て、子どもたちはみんなびっくりします。怒りをためこんで抑えているとちよつとしたきつかけで爆発が起くると知なのです。さらに、爆発を止めるために水を入れるのですが、日常生活で水に当たるものは何かも

一緒に考えます。すると、「走る」「友達に話す」「数を数える」などが出てきます。

発達障害を持つ弟をから

かつて面白がっていた男の子が火山の体験の後、「僕が弟をからかっていると弟の火山が噴き出すんだ」と言いました。つまり、自分の言動が弟の怒りの爆発のきっかけになっていると気づいたんですね。一般的な怒りではなく、子ども達も自分の体験と結びつけて、日常生活の洞察につなげられるようになるのです。

また、暴力の責任についても話します。子どもたちの中には、両親の暴力は自分のせいでは起るんだと自分を責めていることがあります。ですから、子どもにも両親の暴力は大人の責任であつて、子どもへの責任ではないと繰り返し伝ええます。それがとても重要です。

次に、子どもの責任は何かも一緒に考えます。すると子どもたちは、「歯を磨く」「学校に行く」「宿題をやる」「生きること」などと言い出します。早い段階で暴力の責任は子どもにないと伝えると子どもは安心して伝えますが、そうでないと、ずっと自分を責め、いい子でいなければならぬと思ひ込んでい

くことも多いです。

母親が変わると
子どもが変わる

プログラムを受けていくと子どもたちは「グループでは自分の家のことを隠さずに話してもいいんだ」「学校でつい手が出ちゃったけど、プログラムを受けた後はハツとして止まるようになった」と自分の意見を言うようになりました。また、自分の怒りをコントロールするようにもなります。

母親も子どもに目が向くよう
うに変わってきます。グループ
の中で被害を受けた母親の辛
さを共感し合いつつ、子どもの
気持ちに焦点をあてると、子
どもを尊重するようになりま
す。そうすると、子どもの意
見をしっかり聴けるように
なるのです。母親と子どもが
価値観を共有できるところに、
子どもと母親が同時並行でプ
ログラムを受ける意味があり
ます。

それぞれの家庭で身につけた価値観の再学習が本来に必要です。夫婦や家族間で尊重し合う関係性について、学校や地域で学ぶ場を増やして、いてほしいと心から望んでいます。

* * コンカレントプログラムの詳細は NPO 法人 RRP 研究会のホームページ (<http://www.rrpken.jp/index.html>) をご覧ください。
RRP の名前は、Respectful Relationship Program (尊重し合える関係のためのプログラム) の頭文字からとったものです。

子どもは尊重されてこそ育つ 良い夫・良い父になるための 「ケアリングダッド」プログラム

森田展彰さん（精神科医）

子どもが受けるダメージ

「面前DV」という言葉があります。子どもの目の前で大きな存在である親同士がDVの関係にあつて、特に、母親が殴られる現場を見るのは怖く、ショックな出来事です。心に傷が残り、その後もPTSD（心的外傷後ストレス障害）という症状が出ることもあります。

多くの場合、子どもは親の暴力を直接見ていなくても、親に何かが起こっていることや親同士の緊張は伝わっています。ですから、「子どもはDVを知らないはずだから、大丈夫」ということはありません。

子どもよりも「自分のケアをしてくれ、自分を中心にした形で対応してほしい」と求めてくるので、子どもに対して養育する時間がさけなくなります。また、父親が母親の悪口を言うなど子どもを通して母親に影響を与えようとする、父親が子どもを味方にしようとする巻き込むことがあります。子どもは両親の間で難しい立場に置かれます。さらに離婚となると、子どもは自分のせいで離婚すると思ったり、夫婦関係をとりもつ過度な責任を感じたりします。

DVは本質的には、夫婦などの親密な関係で、一方が一方を支配／コントロールする関係であり、両親の間の関係性が子どもに影響を及ぼします。男性・父親だけが、またその逆（女性・母親）もありますが、どちらか一方が、家族全体のルールを決める、従わせようとする、それが満たされないと大騒ぎ

をします。家族が常にその人の顔を伺い、親の間に緊張があれば子どもは自分の気持ちを表せずに小さくなる、逆に爆発することもあります。

尊重されることが大事

DVがある家庭で育つ子どもは、自分が守ってもらえる存在であるという経験を積めず、非常に大きなダメージを受け、孤独な気持ちになります。子どもは自分が愛されている、尊重されていると思えないと健全な発育ができません。自分の存在に価値がないと感じ、自尊心が下がり、のびのびとできずに萎縮してしまいます。人に対する信頼感や自尊心が低いままになってしまい、学校や思春期以降の

人間関係で、否定的な感じ方を人に対しても自分に対しても持ってしまうのです。時には、不登校やひきこもり、乱暴になる、親しい異性との付き合いが難しくなる、場合によっては、DVを再現し、加害者になることもあるのです。こうしたDVの子どもへの影響は調査でも証明されています。

緊張環境を変えること

ですから、子どもを緊張させる環境を変えることが大事です。親と子どもの家族の中で、暴力をしようとする人、される人、子どもの三者の支援が必要です。まず、DVから逃げた場合、母と子どもの心の回復のケア、生活を立て直すためのサポートが必要です。

行政や民間などの支援があります。

暴力を振るう側を引き離すことで安全感を取り戻すことはもちろん大事ですが、離れた後でも、暴力が繰り返されないことが必要です。ですが、暴力を振るった側へのアプローチがないのが現状で、そのためDVを振るった親と子どもが離れた後の面会交流（離婚した後に別居した親と子どもが交流を持つこと）で、子どもが会いたくないのに無理やり面会交流を要望する別居親の問題が起きています。

「ケアリングダッド」について

カナダには、児童虐待やDVをしている人に対し、良い父親になれるように作られた





森田展彰 (もりたのぶあき) さん

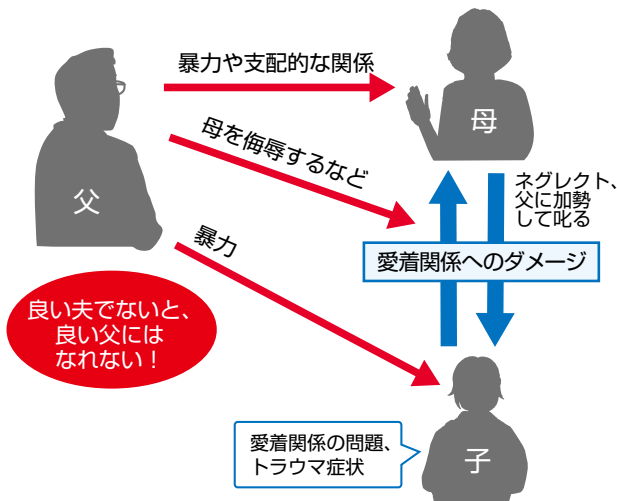
筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻准教授。精神科医。児童虐待・DV等の精神医学的研究等。内閣府男女共同参画局女性に対する暴力に関する専門調査会委員他。

「ケアリングダッド」というプログラムがあります。「良い夫でなければ良い父親になれない」との視点で、暴力や夫婦の関係、子どもを尊重する接し方などを学ぶプログラムです。

児童虐待の場合は、直接的に虐待するのは数的には母親が多いのですが、精神的虐待

である面前DVの通報が増える中で、父親が虐待している側面があり、父親にも介入するようになりつつあります。実際には、私が関わっている児童相談所で、児童とDVに関わる機関が協働して、「ケアリングダッド」を実施してきました。「ケアリングダッド」は、子育てする父親としての考え方や態度を良いものにしていくためのプログラムです。まず、父親が子どもにとって、とても大事な存在であることを伝えます。DVや虐待をしてしま

◆夫婦・家族の良いモデルを考えるための図



父親が子どもにどう関わることが大事か」を書き出したメモ



「ケアリングダッド」を実施する部屋の様子

う父親の場合は、相手をコントロール・支配してしまい、子どものニーズを中心に考える視点を持っていません。ですから、子どもの気持ちの成長を第一に、子どものニーズに合わせた態度を学ぶことが大きな目標となっています。現在、いろいろな親業のプロ

そうすると、本当は自分が

かつて自分が
親に抱いていた気持ち

プログラムがありますが、「ケアリングダッド」は子育てに取り組み基本的な気持ちを引き出していくことがポイントとなっています。

プログラムでは、自分が子どもだった時に、親に対して抱いていた気持ち、親に本当はどうしてほしかったかを書いてもらいます。そして、次に、自分の子どもが親である自分に對して、今どのような気持ちを持っているかを書いてもらいます。そうすると、本当は自分が

が強すぎて子どもに関わり過ぎてほしかったこと、今、子どもが自分に対して思っているだろうことが一致しないことが多いです。そこで、自分が子どもだった時の気持ちにひきつけて現在の自分の言動を考える、子どもの視点から見ると良い父親はどのような父親なのかを自分の体験を通して振り返ります。子どもの視点をたどりながら、子どもがどのように感じているかを知ることが目標になっています。

ただ、自分が子どもだった時に抱いた気持ちをそのまま自分の子どもに当てはめてはうまくいきません。親に関わってもらいたかった自分の気持ちとしては、親中心に関わりすぎるか、または、全く関わらないかで、子どもとの関わり方のレバトリリーが少ないのです。ですから、プログラムを通して具体的な関わり方の選択肢を増やしていきます。また、男性たちが自分の弱点やうまくいっていない点をグループで、率直に話す。そうしたコミュニケーションの経験が子どもを尊重する関係にもつながります。「ケアリングダッド」は子どもを虐待、DVをした父親を対象にしたものですが、子どもに対して過度に支配的な行動や自己中心的な態度をとらずに、尊重した関わりを学ぶ点で、母親にも、さらに子どもに関わる人たちがすべてに学んでほしいプログラムだと思います。

千代田の
子育て

子育てひろば「あい・ぽーと麹町」

地域で一緒に子育て・子育て



つどいのひろば「なないろ」での「まちプロタイム」



大日向さんとカフェ担当のまちプロの皆さん



スタッフの皆さん



「なないろ通信」毎月発行。
1ヶ月のプログラムを掲載

さらに、カフェ（名称 AI café：藍カフェ）があるのも特色のひとつ。まちプロの皆さんがハンドドリップでコーヒーを入れてくれ、福島産の無垢材のぬくもりや木の香りに包まれホッとします。

まちプロの皆さんが登場する「まちプロタイム」は、開始時間に合わせて利用者が集まってくるほどの人気です。千代田区から認定を受けた子育てコーディネーターが子育て相談にも応じます。子育て中のお母さんやお父さんはまちプロさんを「千代田の父」と呼んで、近しい存在と感じているそうです。



AI caféではまちプロの男性の皆さんが
コーヒーを入れています



***まちプロ** 子育て・まちづくり支援プロデューサー。住友生命保険相互会社の助成による企画で退職前後のシニア男性があい・ぽーとステーションの養成講座を受講後、認定資格を得て、子育てを核とした“まちづくり”の現場で職業経験やパワーを活かして活躍している。

子育てで、世代と地域を紡ぐ交差点

千代田区は江戸開府 400 年の歴史があり、日本の中心でもあります。その千代田の子育てひろば「あい・ぽーと麹町」は、子育て中の方たちと地域の方たちが世代や地域を超えて集まる文化の交差点です。千代田区には、「顔の見える関係ができる」「区が子育て・家族支援者（子育て支援者）や子育て支援コーディネーターを養成」「ワンストップでの相談を実現」などの特徴があります。この子育てひろばに集まってくれる方たちを大切にしながら、千代田区と共に、新しい時代の新しい地域を創っていききたいと思います。

また、生涯を通して地域や社会とつながり、自分の力を活かしていく就業力を持ってほしいとの思いから「女性の生涯就業力講座」を実施しています。地域での子育て孫育てや夫婦共助の人生設計、さらには、現代アメリカ事情などのテーマで学び、交流できます。この子育てひろばを通して一人ひとりの豊かな人生への扉を開いてほしいです。

NPO 法人あい・ぽーとステーション代表理事
おおひなたまさみ
清泉女学園大学学長 大日向雅美さん



■ 千代田区男女共同参画センター MIW では、事業等の一時保育の際に、NPO 法人あい・ぽーとステーションの認定子育て・家庭支援者に保育を依頼しています。

第4回 MIW祭りを 開催しました。

昨年(平成28年)9月30日～10月1日、第4回MIW祭りを開催しました。テーマは「一歩前へ 楽しく わかりあって」。MIWの登録団体の皆さんが日頃の活動を発表し、千代田区の大学や企業・NPO 等にご参加頂き、盛り上がりました。



実行委員長
戸川トモ子さん



オープニング演奏



明治大学
マンドリン倶楽部の演奏

トークショー

元気セッション「一歩踏み
出そう!-女性起業の現場から」
ゲストの4人



千代田区女性史サークル



千代田アマ・ビデオクラブ



会場でパネルを見る



ホームヘルパー全国連絡会

(一社)裁判員ネット



Smile 研究会

(一社)東京建築士会女性委員会
バリアフリー部会



キッズコーナー

佐川急便のキャラクター
「はこぶくん」



手作り小物の販売
女性ネット Saya-Saya とスルシの皆さん

子育てが楽しくなるママカフェ@千代田



千代田区の大学も参加。
左から明治大学、上智大学、中央大学



ちよだ女性団体等連絡会と
障がいをもつ子どもの現在と未来を考える会



神保町応援隊

- 参加した登録団体
(登録順・*今年初参加団体)
- ◇ ちよだ女性団体等連絡会
 - ◇ (一社)東京建築士会女性委員会バリアフリー部会
 - ◇ 千代田区女性史サークル
 - ◇ ホームヘルパー全国連絡会
 - ◇ 東京バツイチ応援倶楽部
 - ◇ ななかまど
 - ◇ NPO 法人エガリテ大手前
 - ◇ すずらの会
 - ◇ Smile 研究会
 - ◇ 神保町応援隊
 - ◇ (一社)裁判員ネット
 - ◇ (公財)東京YWCA
 - ◇ 九段労務研究会
 - ◇ キララ・ソーイング
 - ◇ 家庭栄養研究会

- ◇ 千代田アマ・ビデオクラブ
- ◇ 子育てが楽しくなるママカフェ@千代田*
- ◇ NPO 法人国際朗読ことば協会*
- ◇ 障がいをもつ子どもの現在と未来を考える会*
- 千代田区内の大学
- ◇ 明治大学男女共同参画推進センター、女性研究者研究活動支援事業推進本部
- ◇ 上智学院男女共同参画推進室
- ◇ 中央大学学事部・中央大学 NHP (ノンハラスメントプロジェクト)
- 企業と団体
- ◇ 佐川急便千代田営業所
- ◇ 日本政策金融公庫東京支店
- ◇ めいづの WA
- ◇ 一休のひらめき
- ◇ NPO 法人女性ネット Saya-Saya
- ◇ エシカルショップ(株)スルシ

交流会風景



◆ MIW パープルリボン・プロジェクト 特別イベント「N0! 女性と子どもへの暴力」

■平成 28 年 11 月 25 日 (金)

■会場：日比谷コンベンションホール

女性に対する暴力をなくす運動期間 (11/12 ~ 25) にあわせ、上映会「Girl Rising ~私が決める、私の未来~」と中央大学の学生による「DV と子ども」についての発表を実施しました。早すぎる結婚や出産、女子教育を阻む壁を乗り越える女の子たちの現状と現代社会での暴力の問題を結びつけ、自分らしく生きられる社会について考えました。

写真パネル展「Girl Rising」「ネパールの女の子の一生」(MIW 交流サロンで)
下左：中央大学の学生の発表風景
下右：映画と女子教育支援について話す富田佳代さん



講座 職場で、学校で私自身の性を生きる

■平成 28 年 10 月 27 日 (木)、11 月 2 日 (水)

■講師：三戸花菜子さん (NPO 法人 ReBit)、川田篤さん (日本 IBM)

性的マイノリティの当事者を講師に、学校や職場での性の多様性について、理解を深めました。講師から「あなたも明日からアライ (共感者) になりましょう!」と力強いアピールがありました。



講師 三戸花菜子さん



講師 川田篤さん

マインドフルネス入門講座

■平成 28 年 12 月 2 日 (金)

■講師：越川房子さん (早稲田大学文学学術院教授)

ストレスへの対処法としてマインドフルネスを学びました。「今、この瞬間に意識を向け、評価を気にせず心の働きを観察する」というマインドフルネスの方法を実際に体験しました。



講座風景

子育てパワーアップ講座

■平成 28 年 10 月 15 日 (土)、麹町区民館にて

■講師：瀬川未佳さん (武蔵野大学非常勤講師)

子どもの自尊心を育てるヒントをお父さんとお母さんが一緒に学びました。



講座風景

MIW 相談室

MIW の相談室では、夫婦関係、男女の生き方・働き方、性に関すること、セクシュアル・ハラスメントや夫婦や親密な関係での暴力などについて相談を受けています。面接でも電話でも相談できます。予約制です (区内在住、在勤、在学の方対象)。

※ 託児サービス (有料) があります。

☎ 03-5211-4316

◆相談日時

(英)=英語での相談もできます。

火曜日
毎週 16:30 ~ 20:30

法律相談 (女性のみ)
第 2 13:30 ~ 16:00

水曜日
第 1・3・5 10:30 ~ 15:30
第 2・4 16:30 ~ 20:30

無料カウンセラーや弁護士 (ともに女性) が担当します

木曜日
第 1・3・5 16:30 ~ 20:30
第 2・4 10:30 ~ 15:30

金曜日
第 1・3・5 10:30 ~ 15:30 (英)
第 2・4 16:30 ~ 20:30 (英)

土曜日
第 1・3・5 10:30 ~ 15:30
第 2・4 10:30 ~ 15:30 (英)

MIW インフォメーション

◆ MIW ビデオサロン

最高の人生のはじめ方 (ロブ・ライナー監督 / アメリカ)

◆日 時 4 月 21 日 (金)

著名な作家モンテはアルコールに溺れ孤独な生活を送っていた。そこへシングルマザーのシャーロットと 3 人の娘が現われ…。人生と再生を明るく優しく描いたヒューマンドラマ。

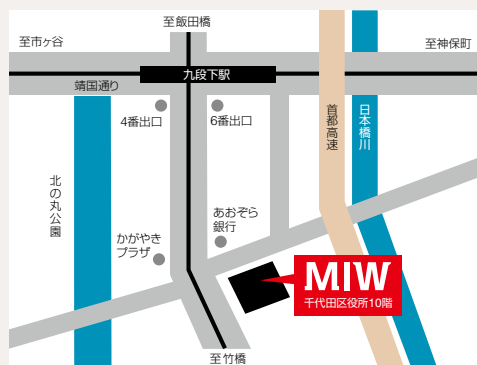
麦の穂をゆらす風 (ケン・ローチ監督 / イギリス・アイルランド他合作)

◆日 時 5 月 19 日 (金)

1920 年、英国からの独立運動に身を投じるアイルランドの青年デミアン。独立を果たすが、次にアイルランド人同士が敵味方になることに…。自由を求める人々を描く心揺さぶられる作品。

◆時間はともに 14:30 ~、18:30 ~

会場 MIW 交流サロン (無料、当日会場にお越しください)



千代田区男女共同参画センター MIW (ミュウ)

所在地 〒102-8688 東京都千代田区九段南 1-2-1 千代田区役所 10 階
交通機関 東京メトロ東西線、半蔵門線、都営地下鉄新宿線「九段下」駅下車、徒歩 5 分
開館時間 月曜日～金曜日 午前 9 時～午後 9 時 土曜日 午前 9 時～午後 5 時
休館日 日曜日、祝日、年末年始
TEL 03-5211-8845 / 相談予約受付 03-5211-4316 FAX 03-5211-8846
E-mail miw@city.chiyoda.tokyo.jp
URL http://www.city.chiyoda.lg.jp (「暮らし・手続き」▶「男女平等・人権」▶男女共同参画センター MIW からお入りください)

◆編集後記

区は平成 29 年 3 月に「第 5 次千代田区男女平等推進行動計画」を策定しました。この計画に沿って、MIW は男女共同参画社会の実現を目指す地域の拠点施設として、講座数や相談時間を増やし、女性活躍、性的マイノリティの理解促進、働き方改革等社会の関心・課題に焦点をあてて活動していきます。MIW マスコットキャラクター「みゅうじろう」と共に皆さまのご利用をお待ちしております。(Y)
※「第 5 次千代田区男女平等推進行動計画」は、区のホームページでご覧いただけます。